みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Walgett : An Aboriginal Community in a Depopulated Town, New South Wales

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松山, 利夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003980

国立民族学博物館研究報告30(3): 331-348 (2006)

ウォルゲット・ノート
──過疎化する地方町とアボリジナル──

松　山　利　夫*

Walgett: An Aboriginal Community in a Depopulated Town, New South Wales

Toshio Matsuyama

ニューサウスウェールズ州北西部に位置する地方町ウォルゲット Walgett は，街区人口の 60% 以上をアボリジナルが占める。人口のうえでアボリジナルがマジョリティを占める状況は 1960 年代以降における農牧業の機械化と，それがもたらしたヨーロッパ人の人口流出によって出現した。現在，この町にはガミラロイ Kamiraloi を中心に，ユアラライ Yuarralai，ウィラジュリ（ウァイラジュライ）Wiradjurai をはじめ，その他の少数の言語グループ出身者が生活する。

1835 年ナモイ川近くに設立されたウォルゲットは，1960 年代までニューサウスウェールズ州北西部における農牧業のひとつの中心地として発展してきた。当時，多くのアボリジナルはフェンサーや牧場境界の見廻り，毛刈り職人や雑役夫として牧場に雇用された。しかし，その後の機械化によってギンギ・ステーション Gingie Station やナモイ・リザーブ Namoi Reserve，それに街区周辺に居住したアボリジナルのほとんどは失業者となり，彼らは街区西部のキャンピング・グラウンドに流入する。これに対して町当局と州の住宅局はアボリジナルの不潔で粗末な住まいを排除するために，街区西部に彼らのための住宅を建設した。こうして街区のアボリジナル居住区は，トップ・キャンプとボトム・キャンプとよばれるようになった。

その後，町当局は行政区病院の医師や公立学校の教員，および警察官を確保する目的で，彼らのための住宅を建設する。それがフラッシュ・タウン Flash Town で，この街区の形成は，ウォルゲットのアボリジナルにとって，州の行政権力を担うヨーロッパ人とのあらたなコンタクト・ゾーンをもたらした。こうした街区の空間分節は，ニューサウスウェールズ州北西部における植民地史を反映したものとなっている。

*国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words：Walgett, Kamiraloi, New South Wales, Local town
キーワード：ウォルゲット，ガミラロイ，ニューサウスウェールズ，地方町

Walgett is located in northwest New South Wales. Over 60% of the town's population of around 2,300 is of Aboriginal descent. With a few exceptions, they are from the Kamiraloi, Yuarralai, and Wiradjurai linguistic groups.

Walgett town was founded in 1835 on the banks of the Namoi river, near its junction with the Barwon river. The name Walgett is an Aboriginal name for the confluence of two rivers. It grew as a pastoral industry and grain farming centre until the 1960s. From then until the 1980s the industry became more mechanised and as a result almost all the Aboriginal people who worked as skilled fencers, boundary riders and shearers were put out of work. Upon becoming unemployed many Aboriginal people who had lived at Namoi Reserve, Gingi station and on the fringe of the town moved to live on a camping ground at the western end. Here, housing of New South Wales, a State Government Department, and Walgett Town Council built some houses which are now called "top camp" and "bottom camp".

In the 1980s the Town Council built "Flash Town" near the airport outside the town where school teachers, police and doctors from the district hospital began to live. For Aboriginal people this "Flash Town" created a new contact zone with the wider "white" society; another point of contact away from the old town. The residents of "Flash Town" are educated and, due to their professions, have a good deal of influence on the town's society (including Aboriginal people).

Thus there now exists an arrangement of three spaces of living and power within the town's jurisdiction; the two Aboriginal "camps" at the western end, the white community of the town proper, and "Flash Town". This organisation of space and people comes from and reflects the way this northwest corner of New South Wales was colonised after 1835. Ever since that date the Aboriginal population has been marginalised in its physical and power position in the town, the region, and in wider Australian society.

1　はじめに
2　苦悩する地方町ウォルゲット
2.1　境界の町
2.2　人びとのウォルゲット観
（1）アボリジナルが語るウォルゲット
（2）ヨーロッパ人の見方
（3）すれ違う見解
3　アボリジナル・タウンの成立
3.1　2 つのリザーブ
3.2　失業者集団の出現
4　第 3 のコミュニティ
4.1　フラッシュ・タウン
4.2　警察とアボリジナル
5　まとめ

1　はじめに

オーストラリアの南東部ニューサウスウェールズ州には，人口のうえでアボリジナルがマジョリティである 2 つの地方町が存在する。ウォルゲット Walgett とウィルカニア Wilcania である。いずれの町も，かつては牧畜産業の中心として繁栄した。しかし，1960 年代にはじまる基幹産業の機械化とそれにともなう失業者の増大，それに人口流出とは都市機能の著しい低下をもたらし，これらは過疎の町となった。

このノートは，そのひとつウォルゲットをとりあげた，予備的な調査報告である。ここでは，ウォルゲットのアボリジナル・コミュニティが「白人対黒人」という歴史的に構造化された位置におかれてきたこと，その状況は現在もなお変わりないことを報告したい。

2　苦悩する地方町ウォルゲット

2.1　境界の町

ニューサウスウェールズ州には，多数のアボリジナル・コミュニティが存在する[1)]。その多くはいわゆる「白人オーストラリア」Settled Australia にあり，「アウトバック」Outback とよばれるヨーロッパ人人口の少ない州西部では，その数が極端に少なくなる（図 1）。それは都市の分布に対応したものであり，この州のアボリジナルはすべてが地方町をはじめとする都市に生活する。

「白人オーストラリア」と「アウトバック」は，それぞれ都市と辺境，文明と未開，手入れの行き届いた田園と荒々しい自然に挑む開拓者魂とを表象する。それゆえにこの 2 つの地理的区分は，この国のヨーロッパ人による社会的な空間認識の反映でもある。ウォルゲットはその境界に位置する。それはこの町が，いまもってヨーロッパ人と先住民アボリジナルとのコンタクト・ゾーンにあることを暗示する。

現在，ウォルゲットの街区人口は約2,300人，その60%をアボリジナルが占める（ウォルゲット役場の統計による）。その主要な集団はガミラロイ Kamilaroi（Gamilaraay），ユアラライ Ualarai（Yuwaaraaray）とウェイルウァン Weilwan（Wailwan）であるが（図 2），他にウィラジュリ（ウァイラジュライ）Wiradjuri など少数の周辺集団の出身者が含まれる[2)]。彼らは対外的にはクィンズランド州南部の諸集団とともにマリー Murry を自称するものの[3)]，町での日常生活においてはそれぞれの集団への明確な帰属意識

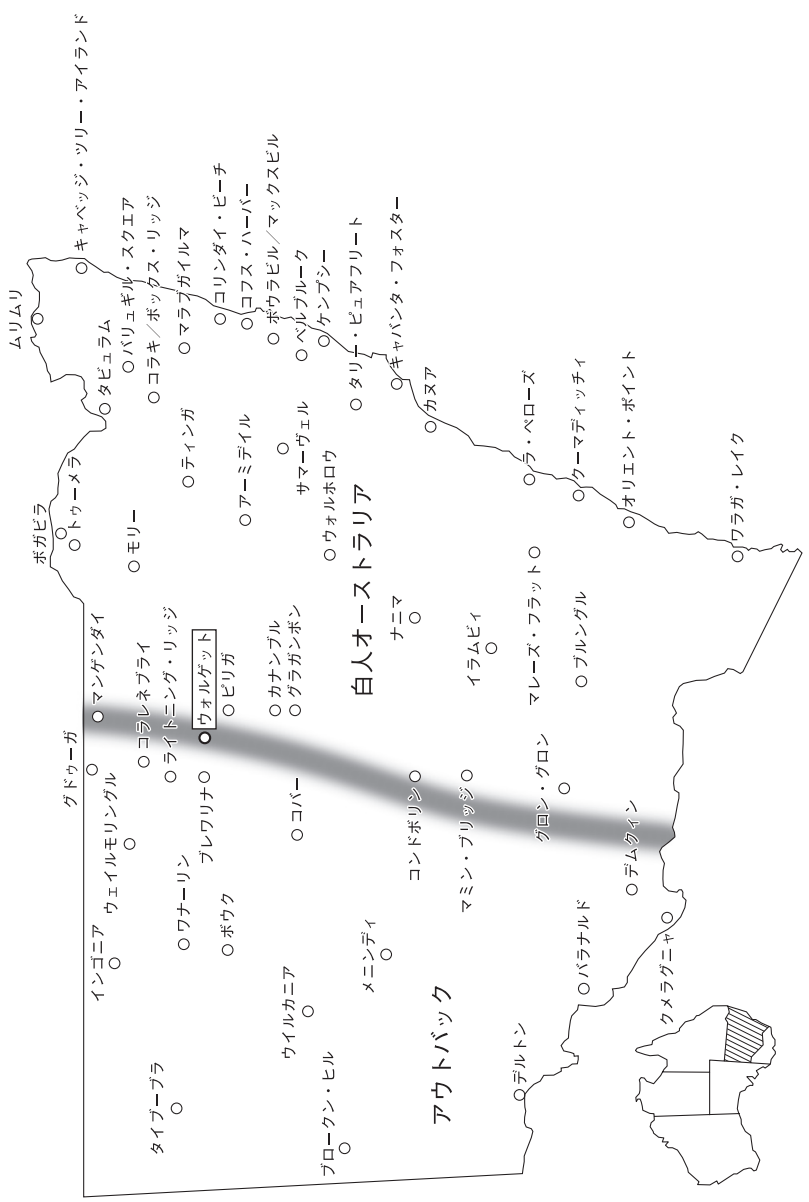


図 1　ニューサウスウェールズ州のアボリジナル・コミュニティ
（Aboriginal Communities Development Program の資料による）

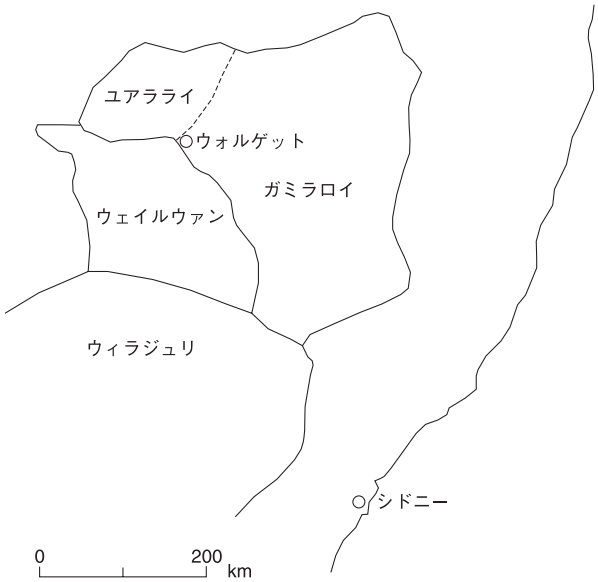


図 2　ウォルゲット周辺の集団

をもっている。それは例えば面接調査に際して，「彼はガミラロイで，私はユアラライだ」といった形で表出する。

しかし，さきの 3 つの集団についての人類学者や言語学者の認識には，微妙な差異がある。彼らの見解が分かれるのは，ガミラロイとユアラライについてである。ティンデールは両者をそれぞれ独立した集団とするのに対し（Tindale, N. B. 1974: 194–195, 199），ホートンはユアラライをガミラロイの一方言集団に含めている（Horton, D. 1994: 945–946）。一方，言語学を専攻するアシュとギアコンらは，復元されつつある言語による限りユアラライとガミラロイの文法は酷似し，単語の 70% を共有するとしながらも，ユアラライをガミラロイから区別している（Ash, A. et al 2003: 5）。いずれにしてもウェイルウァンを含めたウォルゲットに生活する 3 つの主要な集団は，親族組織をはじめ創世の神バイアミ Baiami（Bayamee）の信仰と成人儀礼ボーラ Bora など，文化的に高い同質性を保持していた。

これらのことを考慮したうえで，ここでは彼らの発話にみられる帰属意識にしたがって，この 3 集団をそれぞれ独自のものとして取りあつかう。ただし，これらの集団は，町での生活のなかで，何らかの機能を個別に担うことはない。なお，彼らを一括して記述する場合には，アボリジナルの名称を用いる。

そうした彼らはヨーロッパ人をワンダ Wanda とよび，彼らが人種主義者だとみる

ヨーロッパ人をレッド・ネック Red Neck と称する。「尻の穴」といったようなきわめて軽蔑的な意味をもつワンダはウォルゲットに特徴的な呼称とみられ，これより西の「アウトバック」ではガバ Gubbah（Government から派生した語）が，東の「白人オーストラリア」ではホワイトフェラ Whitefella が一般的である。またレッド・ネックは，近年まで「アウトバック」に流通したマッチ箱のデザインに由来するもので，それには「赤毛の白人女性」が描かれていた。彼女らもまた屋外での作業が多くあったため，首すじは赤く日焼けしていた。この町のアボリジナルはそうした屋外労働者に対するヨーロッパ人の間での一般的な蔑称レッド・ネックを，人種主義者だとみる彼らへの呼称に採用していた。この一種の隠語は，ウィルカニアやブレワリナ Brewarina など，ニューサウスウェールズ州西部の「アウトバック」のアボリジナル・コミュニティに特徴的である。

こうしてウォルゲットは，ヨーロッパ人の社会的な空間認識だけでなく，ガミラロイやユアララライをはじめとするアボリジナルにとっても境界の町という意味あいが強い。それはこの町にさまざまな影を落としている。

2.2　人びとのウォルゲット観

ウォルゲットは，ガミラロイ語で，大河川が合流する土地を意味する。ダーリング Darling 河の支流バーウォン Barwon 河とナモイ Namoi 河の合流点に近いこの町は，周囲を人工堤防に囲まれたオーストラリアには珍しい輪中の町で，週に 6 便ダボー Dubbo 経由でシドニーを結ぶセスナ機の空港もその中にある。そうした境界の町に暮らす人びとは，ウォルゲットをどうみているのだろうか。

(1) アボリジナルが語るウォルゲット

アンクル・トミー（男性の老人）　トミーは，ウォルゲットの北に位置したワランブール牧場 Waranbool Station で，1930 年に生まれる。幼少期をクィンズランド州境に近いアングルドール・アボリジナル・ステーション Angledool Aboriginal Station[4] で過ごし，1936 年のステーション閉鎖後，ブレワリナ・アボリジナル・ステーションを経てウォルゲットに移る。この町で 40 年近く生活してきたという彼は，いま行政区病院 District Hospital に設けられた老人ホームに暮らしている。

ユアララライ語の伝承者を自称し，言語学者に多くの情報を提供してきたトミーにとって，ウォルゲットは「いいところ」である。その彼にとって，街区に居住するヨーロッパ人は表だってアボリジナルを排除はしないものの，差別的なことには変わ

りない。彼はその状況に抵抗する手段として，電動車椅子での外出時には必ずアボリジナル旗を掲げている。トミーにとっては，街区居住者よりも農牧場に働くヨーロッパ人の方が「いい人」である。

マリー（中年女性）　公立小学校の補助教員（これをローカル・ティーチャーとよぶ）であるユアララライ出身のマリーは，ウォルゲットに生まれた。学校教育をめぐる問題は後述するとして，彼女はこの町では依然としてアボリジナルの差別がきついことを，次のようなデータで語る。

「この町でアボリジナルを雇用しているのは薬局と雑貨店がひとつずつ，それに帰還兵連盟 Returned Services League が運営するバーとレストランだけしかない。その他のサービス業は，スーパーマーケットやツーリスト・インフォメーションを含めて，パートタイムでしかない。診療所などアボリジナル関連施設を除くと，我われに開かれた職場はいまもってほとんどない。そのことがアボリジナル子弟の学習意欲や将来への希望を削ぎ取っている」。

ヴィッキー（若い女性）　1970 年ウォルゲットのガミラロイ家庭に生まれた彼女は町の公立高校を卒業すると，カナンブル Coonamble とバサースト Bathurst で教育をうけた。その後この町の TAFE（職業訓練校 Technical and Future Education）のアボリジナル教師をつとめて 1 年半になる。彼女はこの町のアボリジナルの現状に不満である。

TAFE にはいくつかのアボリジナル・コースが開設されている。例えばアボリジナル・アイデンティティのクラスでは，アボリジナルの歴史，とくに植民期をつうじて土地ごとに異なる個別の出来事と，それが現在におよぼしている影響を学習する。しかし，ウォルゲットには，その先生ができる年長者がいない。ダボーで教育をうけたこの地域の出身者に，それを依存している状態だという。

彼女が小学生だった頃，商店はいまよりはるかに多く，その店やモテルには鉄柵も金網もなかった（写真）。「この町に戻ってみると，アボリジナル，とりわけ若者は多くの問題をかかえている。彼らは希望をもてず，アイデンティティを喪失し，アルコールや薬物におぼれて健康を害している。そうした遠隔地のウォルゲットの TAFE に赴任する人がいず，出身地だから了承したものの，近くバサーストに戻るつもりだ」と彼女はいう。

ダリワア・エルダーズ・グループ会合の参加者（中高年の男女）　この地域におけるユアララライの聖地ナーラン湖 Narran Lake のユアララライ名ダリワア Dharriwaa を冠した年長者グループは，町のメインストリートの一角に小さなオフィスを構えてい

写真　鉄柵で囲まれたオアシスモテル

る。このグループは，ウォルゲットとその周辺地域を対象に，アボリジナル文化遺産の記録作成とその普及を公式的な目標に掲げ，ヨーロッパ人女性をマネージャーに雇用して集会などの運営にあたっている。その事業には，ダボーの病院で長期療養中のエルダーの慰問も含まれる。

ここでの会合に集まった人びとは，公立学校をめぐる問題を別にすると，住宅事情がこの町がかかえる問題のすべての根元であるという。彼らが居住するのは州の住宅局が建設した家屋で，住宅の破損や不具合は申請に応じて住宅局が修繕する。しかし，彼らにとってそれは名ばかりであるらしい。「しかも住宅規模が小さすぎ，夏季は家の中が暑くなり，子供は眠れず夜間に街区をうろつくことになる。その結果，授業に集中できず，学校へ行かず，出席しても途中で抜け出してしまう。それが子供をアルコールや薬物，窃盗にはしらせている」。これがウォルゲットに暮らすエルダーたちの見解である。

アボリジナルが語るウォルゲットには，希望や明るさが読みとれない。郷愁を含むとはいえトミーもマリー同様，この町が依然として差別的であると主張する。ヴィッキーは若者がかかえる問題とともに，年長者が社会的な機能を担えないことへの苛立ちを隠さない。その年長者たちは，州政府の住宅局が諸問題の根元であると考えている。

(2) ヨーロッパ人の見方

人口のうえでマジョリティを占めるアボリジナルは，ウォルゲットをいまもって差別的な町だという。ヨーロッパ人はそれをどうみているのだろうか。

ジュリアン（若い女性）　彼女はドイツ移民一世の子供として，1967 年にウォルゲットに生まれた。18 歳までこの町で暮らし，その後シドニーで教育をうけた。現在は「白人オーストラリア」の地方町，モリー Moree の TAFE でアボリジナルのクラスを担当する美術教師の職にある。

彼女が公立高校に通った頃のウォルゲットは，とてもよい町だったらしい。「アボリジナル・エルダーにはいい人が多く，アボリジナルの友達もたくさんいた。しかし，10 数年前からこの町は大きく変わった。その頃から 18 歳以下の若者が荒れはじめ，それは今も続いている。彼らは盗みをし，盗品を処分してアルコールを手に入れる。男女とも 15 ～ 16 歳になると子供を持つが，その子を養育できなくて両親や祖父母に託している。

エルダーたちはこれらの若者をコントロールできない。体罰を加えると DV（家庭内暴力）だといってせめたてる。その結果，若者のモラルは著しく低下した。私に子供がいたとしても，いまのウォルゲットの学校には行かせないだろう。それにあの町に戻るつもりはない。モリーに比べても雇用機会の少ない，斜陽の町だからだ」という。

ジュリアンの両親　ともにドイツからの移住者で，この町のオアシスモテルで結婚式を挙げた。ジュリアンの母方の祖母はシュツッツガルト近郊に健在で，両親は年に一度，必ず祖母を見舞っている。母親はウォルゲットの公立小学校の教師を永年勤めた人で，この町に住んで 40 年以上になる。しかし，「住みはじめて以来よくなったと思えることはひとつもない」。

「この町のヨーロッパ人は白人を自称するが，地つきの人は，祖先をたどれば誰であれ，なにがしかのアボリジナルの血をうけついでいる。その割合は 90% 以上に達するはずだ」とみている。

教会関係者（中年の男性）　1 人は聖ヨーゼフ・カトリック教会に所属し，ガミラロイとユアララライの言語復興に取り組んでいる。いま 1 人は，教会が運営する小学校の校長である。彼らはウォルゲットの町と人びとを次のようにみる。

「かつてこの町では，ヨーロッパ人とアボリジナルは地理的に分かれ，両者はそれ

ぞれのやり方で生活していた。それは例えば，モテルのフロント・バーで飲食するのはアボリジナルで，メイン・バーにはヨーロッパ人だけが集まるというかたちをとって表れていた。当時の町は平和だったし，それはそれでよかった。

混住が進むと，かつてのアボリジナル・ステーションやリザーブであったギンギ Gingie とナモイ Namoi に住みつづける人びとは（後述），街区居住者をアップ・タウン・ニッガーズ Up Town Niggers とよびはじめた。アボリジナルの間では経済的な格差がひろがり，豊かなアッパー・クラスは飲酒をつつしむが，貧しい人びとは貧しいヨーロッパ人同様に大量に酒を消費するようになった。

教会に付属するこの学校の生徒は 9 割がアボリジナルで，そのすべてが祖父母に養育されている。彼らの親は 15〜16 歳でしかなく，しばしば酒びたりになっていて子供の世話ができないことによる。若い親にとって，酒にひたりセックスをして子供をもつのは，現状に対する一種の挑戦だと思われる。しかし，モラルの低下は否めない」。

ジョン（老人の男性）　癌の治療をおえてシドニーから戻り，モテルの雑用係で生計を立てるジョンは，75 歳になる身寄りのない老人である。彼がこの町のいわゆる地つきのヨーロッパ人かどうかは定かでないが，長くウォルゲットに暮らしてきた。その彼にとって，ガミラロイやユアララライをはじめとするこの町のアボリジナルは黒人である。

「黒人は我われ白人の税金で生活している。住宅局が建てた家に生活し，修繕も政府にまかせ，数年もすれば新しい家に移る。この町の白人は，誰でも祖父母から両親，その子から孫へと何 10 年にもわたってメインテナンスをしつつ家を維持している。それなのに黒人は失業保険金を支給され，それを受けとるとその日のうちに飲んでしまう。保険金支払い日の夜の騒ぎようは，見ての通りだ。

そのうえ彼らは働こうとしない。文化を強調するが，この町の黒人は何もしていない。黒人が正義で，我われ白人は土地を盗んだ悪者だといわれるのは腑に落ちない」。

(3) すれ違う見解

さきに見たユアララライやガミラロイといったアボリジナルのウォルゲット観がこの町の一面を語るように，ヨーロッパ人の見方もまた，アボリジナルに批判的なジョンを含めて，この町のいくつかの側面を明らかにする。ヨーロッパ人の見方に共通性があるとすれば，表面的には穏やかだったかつてのウォルゲットへの郷愁や感慨である。それらをもたらしているのは，若いアボリジナル層の「モラルの低下」であろ

う。しかし，それを現状に対する抵抗だとみるのは，2 人の教会関係者だけである。この見解はアボリジナルの側には認められなかった。

アボリジナルとヨーロッパ人の町の見方は，すれ違ったままにある。両者の混住がはじまり，60 年代半ばにはアボリジナルが公立学校のマジョリティを占めていた（現在では小中学校と高校の 9 割がアボリジナル子弟となった）。それにもかかわらず，アボリジナルとヨーロッパ人は，いまなおこの小さな地方町ですれ違う見解をもったままむきあい，あるいは対立を内在させたまま生活している。

それを例証する事実がある。アボリジナルのための診療所 Aboriginal Medical Services[5] が開く毎週水曜日の午前中，通りには診察を待つ人びとが集まる。老人もいれば幼児を連れた幾組かの若い夫婦もいる。彼らは町で唯一のスーパーマーケット前にもあふれる。この時間帯にはいつもならヨーロッパ人の買い物客を見かけるが，この日に限って通りには彼らの姿が見えない。ヨーロッパ人はトラブルを避けるかのように，外出をひかえている。彼らはさりげなくこの小さな町を，アボリジナルと住みわけているのである。

それは別の局面にも現れる。帰還兵連盟が運営するクラブのバーやレストランは，かつて「町が穏やかだった頃」，アボリジナルを徹底的に排除してきた施設のひとつであった。しかし，1965 年の「フリーダム・ライド」によるアボリジナル差別の告発以降[6]，ここには多くのアボリジナルが集い，ポッキー[7] に興じビールを楽しんでいる。一方，スポーツ・クラブでグラウンドボーリングに熱中しビールを片手に談笑するのは，ヨーロッパ人だけである。こうしたさりげない住みわけは，この町の歴史がもたらした結果かもしれない。公立小学校の補助教師を務めるマリーは，これを歴史が大きく転回した結果だとみている。

3　アボリジナル・タウンの成立

3.1　2 つのリザーブ

ウォルゲットが開設されたのは 1835 年である。それから間をおかずに，街区の縁辺にはアボリジナルのパーマネント・キャンプが出現する。その人口は 1882 年に約 200 人を数えた。当時のウォルゲットは，ニューサウスウェールズ植民地最大のアボリジナル人口をかかえる町だった（Ferry, J. 1978: 165）。

彼らのキャンプは，この地域に開設された牧場の一隅にも出現する。その居住者はやがて有能な牧童やフェンサー[8] になっていった。しかし，植民地政府の「アボリジ

ニ保護委員会」Aborigines Protection Board と町当局は，これらのアボリジナル・キャンプを排除し，彼らを直接的な統制下におくことを目的に，相次いで 2 つのリザーブを設置する。ナモイ河に面したナモイ（1889 年）と，街区の北東 9 km に設けられたギンギ（1895 年）である。この 2 つのリザーブの人口は，1936 年になって一挙に増加する。この年，ユアララライを主としたアングルドール・アボリジナル・ステーションが閉鎖され，居住者はブレワリナとギンギに強制移住させられた。ナモイにもブレワリナへ移住させられた一部が流入した。こうしてギンギは，1941 年にリザーブからより統制の強いアボリジナル・ステーションへと移行される。そこはナモイとともに，農牧場にとっての季節労働力のプールとして機能した。しかし，それは長くは続かなかった。

3.2　失業者集団の出現

かつて農牧場は，多くの労働力を必要としていた。例えば 19 世紀中葉に 2 万頭の羊を飼育した牧場では常雇い 30 人程度をかかえていたが，羊の出産や毛刈りの季節にはそのうえさらに 50 人ほどずつの季節労働力が必要であった（Abott, G. T. 1971: 121–122）。しかし，1960 年になるとウォルゲット周辺の農牧場における常雇いは 10 人以下に減少し，1984 年にはこれが完全に消滅する（Cunnean, C. and T. Robb 1987: 26）。その背景には，ウォルゲット東郊のユーロカ Euroka 牧場で開発された毛刈り機の普及や，トラックの導入[9]，灌漑用井戸の設置があった。

基幹産業における労働力需要の極端な減少は，この地域に多くの失業者を生みだした。熟練した牧童やフェンサー，毛刈り職人は過剰となり，アボリジナルは同僚であったヨーロッパ人と職を奪いあうことになった。彼らはその競合に敗れる。ユアララライやガミラロイ，ウェイルウァンは，一大失業者集団となった。1960 年代半ばに形成されはじめたこの失業者集団は，1980 年代にはほぼすべてのアボリジナルを組みこんでいった。それ以降，彼らは「福祉の対象者」ないし「福祉で生活する集団」の地位におかれたまま現在にいたっている。

世代をこえて失業状態にあるアボリジナルは，次第にナモイやギンギを出て，街区での居住を選択する（1965 年の人口はナモイ 260 人，ギンギは 150 人であった（Curthoys, A. 2002: 96）。リザーブとステーションの制度は 1960 年代末に廃止された）。彼らが移り住んだのは，街区南西部の空き地，キャンピング・グラウンドであった。ギンギから親族とともにこの地に移動したケイト Keit によると，彼らは上下水道も電気もないこの場所で，波板トタンの切れ端などを建材にする粗末な小屋に生活

したという。当時のアボリジナルは，さまざまな局面で町の生活から隔離されていた。映画館での座席の区別，ホテルやモテルのメイン・バーからの排除，夜間の外出禁止をはじめ，帰還兵連盟では従軍アボリジナル兵の入会が拒否された。

そうした居住地と社会生活上の隔離は，一方で「不潔な」アボリジナルのための住宅建設の動きをもたらした。町当局と州政府の住宅局とは，キャンピング・グラウンドの居住者を排除する目的で，街区西部にアボリジナル用の住宅を設置する。その結果ウォルゲットの街区には，主要な 2 つのアボリジナル居住区，トップ・キャンプとボトム・キャンプが形成された（図 3）。そして 1985 年，少数のナモイとギンギの居住者を含めたこの町のアボリジナル人口は，街区人口の 60% をこえる。アボリジナル・タウン，ウォルゲットはこうして成立した。

それにはヨーロッパ人の流出も貢献する。その大多数は基幹産業の労働力需要の減少とともに町を離れたが，公立学校に限界を感じて子供の教育を目的にこの町を離れたヨーロッパ人も少なくなかった。アボリジナル・タウンは，そのまま過疎の町へと変容していった。そこにあらたに出現したのが，通称フラッシュ・タウン Flash Town という街区である。

4　第 3 のコミュニティ

4.1　フラッシュ・タウン

地理的にも社会的にも境界の町ウォルゲットには，アボリジナルとヨーロッパ人というすれ違う見解をもったままでむきあう 2 つのコミュニティのほかに，彼らがともに皮肉をこめてフラッシュ・タウンとよぶ街区の居住者がある。これを構成するのは公立学校の教師と警察官，行政区病院の医師や事務担当者で，いずれも 3 年を限ってこの町への赴任を命じられた人びとである。町が貸与する彼らの宿舎は，例えば公立学校教師の場合，3 ベット・ルームにセントラル・ヒーティングを装備したブロック造りで，前庭と広い後庭とがある。鉄柵や金網がめぐらされたメイン・ストリートからこの街区へ足を踏み入れると，まるでリゾート地に来たような錯覚におそわれる。賃貸価格は，2 週間当たり 15 ドル前後という安さである。アボリジナル補助教員（ローカル・ティーチャー）の宿舎がベッド･ルーム 2 つだけの，合板の外壁をもつ粗末な木造家屋であるのに比べれば，これは格別の待遇であることは疑いようがない。

公立学校に通うアボリジナルの子弟にとって，両者の明らかな差異はアンフェアーであるだけではない。子供たちは，それを「オーストラリアにおけるアボリジナルの

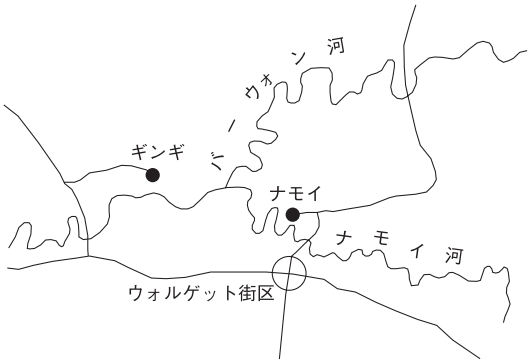
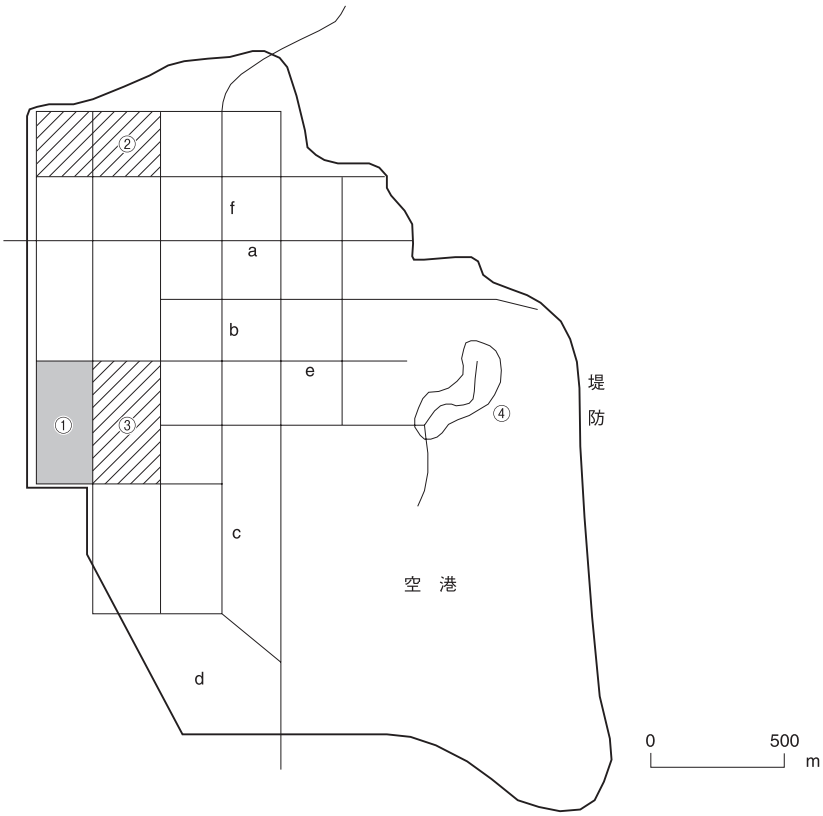


図 3-a　ギンギ，ナモイと街区



①キャンピング・グラウンド
②トップ・キャンプ
③ボトム・キャンプ
④フラッシュ・タウン

a 警察署
b 行政区役場
c 行政区病院

d 墓地
e TAFE
f オアシスモテル

図 3-b　ウォルゲット街区

現実」であるとうけとめている。そこには将来への希望をはぐくむ要素は少ない。それは教育の現場でも同様である。

さきに紹介したマリーは，公立学校に勤務するヨーロッパ人教師 24 人のすべてがアボリジナル生徒の学習能力を疑問視し，教育に熱心ではないという。彼女が「アボリジナル文化」に関する課外授業を提案した際も，正規授業の差し障りになるという理由で拒否された。州政府は遠隔地での教育に多額の予算を割り当てているが，それらはこの町の公立学校へ教師を招聘するために消費され，現場の教育にはまったく役立てられていない。マリーはそれを「白人による力の政治」と表現する。

この教師をはじめ警察官，行政区病院の医師や事務担当者は，ウォルゲットに住むアボリジナルは無論，ヨーロッパ人ともまじわらない。それを象徴するのがパーティである。彼らはフラッシュ・タウンの住人だけでパーティをひらく。その場所には，周囲を鉄柵と波板トタンに囲われ，外部からの視線を遮るオアシスモテルの中庭が選ばれる。筆者が目撃したそのパーティには，40 人近くが参加していた。

彼らにとってウォルゲットは過疎の，しかもアボリジナルの町である。赴任する者が少ないゆえに，彼らの勤続年数には 1 年につき 6 ポイントが与えられる。3 年で 18 ポイントになるその値はシドニーに比べて 18 倍，「白人オーストラリア」に比べても 9 倍に達する。聖ヨーゼフ教会に付属する小学校の校長は，マリーと同様，これが公立学校における教育水準の低下をまねいた最大の要因であり，この町が過疎化した原因のひとつであると指摘する。高度で良質な教育を望むヨーロッパ人は，子供をダボーやシドニーの寄宿学校 Boarding School に入学させた。しかし，生活に費用がかさみ，近年では家族がともにこれらの都市へ移住するようになったからである。

人口 2,300 人ほどの小さな町に，フラッシュ・タウンは 3 つ目のコミュニティとして 10 数年前に出現した。教師と医師の不足がその直接の要因であった。しかし，警察官にはもうひとつ別の理由があった。

4.2　警察とアボリジナル

いまこの町の警察署には 38 人の警官が常駐する。警官 1 人当たりの人口は，ウォルゲット行政区 Shire 全体でも 216 人に達する。この値はきわめて高い。例えば，「白人オーストラリア」の地方町モリー行政区の場合，それは 403 人である。つまりウォルゲットの人びとは，モリーに比べて，より厳しい警察の監視下におかれていることになる。この状況は 1980 年代初め以降にもたらされた。当時（1982 年），警官 1 人当たりの人口はすでに 292 人を数えていた（Morris, B. 2001）。

境界の町ウォルゲットにおける警官の増員は，「アウトバック」の地方町と同様，1988 年の州総選挙に際して保守党がおこなった「法と秩序の確立キャンペーン」Low and Order Campaign にはじまる。このキャンペーンは，非アボリジナル（事実上ヨーロッパ人）はアボリジナル犯罪の犠牲者であると規定し，法にもとづく秩序の回復とその維持のためにアボリジナルへの監視の強化を主唱した。その具体的な方策としてとられたのが，警官の増員である。ウォルゲットでは現在までの間に 12 人増員され，彼らはフラッシュ・タウンに居住した。この町の 3 つめのコミュニティ成立には，こうした事情があった。

現在，警官が監視の主対象とするのはアボリジナル，とりわけ 18 歳未満の「モラルの低下」した子供たちである（成人は 18 歳以上をいう）。彼らは 10 歳から刑事責任を負うことになるが，それについては 1985 年から「警告システム」Cautioning System が採用されてきた。これは 10 歳以上 18 歳未満の少年少女が犯した罪について，それが軽微であると判断される場合には当人とその保護者を警察署によんで警告し，犯罪を防止しようとする方策である（Cunneen, C. and T. Robb 1987: 128–131）。これが青少年の犯罪を抑止するかどうかについては，いまもって見解が分かれている。いずれにしてもこれまでに警告の対象となった主要な犯罪には，アボリジナル相互の喧嘩や暴力行為，商店での万引き，アボリジナル補助教員住宅への家宅侵入と窃盗未遂，乗用車を傷つけるなどの器物破損がある。投石によるガラスの破損や飲酒による粗暴な行為がみられないのは，行為の現場を把握することが困難なためらしい。

これらがなかば日常化したこの町では，モテルや商店が鉄柵をめぐらし，窓には金網をはめ込むことになり，ヨーロッパ人の住宅では番犬を飼うようになった。しかし，把握されている限りでは，彼らはヨーロッパ人を標的にしているわけではない。公立小学校の補助教員マリーによると，それにもかかわらず，この町のヨーロッパ人は自らが標的にされていると思い込んでいるという。

5　まとめ

ガミラロイやユアラライをはじめとするウォルゲットのアボリジナルは，町や牧場のフリンジに居住し，リザーブに収容され，キャンピング・グラウンドを経ていま街区に生活する。州政府の住宅局が建設したその住宅は，メインストリートを境に西部に集中する。その結果，町にはトップとボトム・キャンプとよぶアボリジナル居住区が成立した。また，街区をはずれたかつてのリザーブ，ギンギとナモイには，いまも

合わせて 100 人ほどが生活する。こうしたアボリジナル居住区の変遷は，この町の歴史をつうじて，「白人対黒人」という人種区分とその間の対立の空間への投影であり，それはいまも続いている。この人種間の空間的な境界は，すれ違ったままの町の見方や，アボリジナル診療所の診察日のストリートにも現れた。さらに街区の南端に位置する公営墓地では，宗派ごとに区切られたなかに，アボリジナルの墓がそれぞれ別に設けられている。「せめて死後ぐらいは，親族が寄りそって眠りたい」というアボリジナルの思いは，この境界を際だたせてもいる。

こうした二項対立は，フラッシュ・タウンの形成によって，複雑さを増したかのように見える。そこに居住する教師や医師，警察官などは，ヨーロッパ人を含めて，町の人びととはまじわらず第 3 のコミュニティを成しているからである。ヨーロッパ人はともかくとしても，アボリジナルにとっては，フラッシュ・タウンに住み行政権力を体現するこれらの存在は，高度に非対称的な集団，つまり先住民アボリジナルである「黒人」とヨーロッパ人であり政治・経済的な力を持つ「白人」が出会う社会的な空間としてのコンタクト・ゾーンを，あらたにもたらしたことになる。それは，公立学校における教育の場や，アボリジナル子弟の犯罪とヨーロッパ人の思いこみ，警察の対処をめぐって，具体的なかたちをとってこの小さな町を覆っている。

よく知られているように，オーストラリアは 1972 年以降，多文化主義を採用してきた。それはそれぞれの集団が保持する言語や宗教，文化を尊重し，ゆるやかな国家統合を維持する政策として行政に移されている。しかし，境界の町ウォルゲットのアボリジナルは，被植民という歴史体験のなかで，言語も宗教も「伝統的な」文化も喪失した。その彼らにとって，多文化主義の「恩恵」であるはずの州政府の教育予算は，教師の招聘に費やされている。皮肉にもそのことが，「白人対黒人」のあらたなコンタクト・ゾーンを生みだし，アボリジナル子弟の上昇意欲を削いでいるのである。

注

1）　2001 年センサスによる限りアボリジナル総人口（トレス海峡諸島民を含む）は約 41 万人で，ニューサウスウェールズ州にはその 27%，135,000 人ほどが居住する。これはクィンズランド州についで第 2 位の人口規模である。
2）　Kamilaroi, Ualarai, Weilwan, Wiradjuri は Tindal N. B.（1974），Gamilaraay, Yuwaaraaray は Ash, A. et al（2003），Wailwan は Horton. D.（1994）の表記による。
3）　ガミラロイ語で人を意味する語。r 音は強い巻き舌のため，発音はマディに近い。Murry はその英語表記（Ash. A. J. Giacon et al 2003: 109）。
4）「アボリジナル保護委員会」が設置したアボリジナル居住地には，リザーブとステーションとがあった。このうちステーションは，「保護委員会」が監督官を派遣し常駐させて，アボリジナルの生活すべてを管理したところをいう。アボリジナルはこれをしばしばミッションとよぶ。リザーブの住人に対しては現地の警察がこれを担当した。
5）　診療所は健康診断など保健衛生に関する事項や簡単な診療をおこなう。これに対して行政区病院では，骨折やアルコール障害など，治療に入院が必要な病気を対象にしている。
6）　フリーダム・ライドは，1965 年にチャールズ・パーキンスを中心にシドニー大学の学生が組織した，ニューサウスウェールズ州地方町におけるアボリジナル差別を告発する運動をいう。
7）　スロットルマシーンに似た遊具で，当たりが出ると現金に交換できる。
8）　牧場を区画する柵の製作・設置作業者をいう。
9）　例えばバウンダリー・ライダーとよばれた馬による牧場の見廻りは自動車に代わり，荷馬（牛）車に依存した羊毛の輸送はトラックにおきかわった。

文　　献

Abott, G. T.
1971　*The Pastral Age: A Re-Examination*. North Sydney: Macmillan of Australia.

Ash, A. et al
2003　*Gamilaraay, Yuwaalaraay and Yuwaalayaay Dictionary.* Alice Springs: IAD Press.

Cunnean, C. and T. Robb
1987　*Criminal Justice in North-West New South Wales.* Sydney: The New South Wales Bureau of Crime Statistics and Research.

Curthoys, A.
2002　*Freedom Ride: A Freedom Rider Remembers.* Crows Nest: Allen & Unwin.

Ferry, J.
1978　*Walgett Before the Moter Car.* (Typescript)

Horton, D. (ed)
1994　*The Encyclopaedia of Aboriginal Australia.* Canberra: Australian Institute of Aboriginal and Toress Strait Islander Studies.

Morris, B.
2001　Policing Racial Fantasy in the Far West of New South Wales. *Oceania* 71 (3): 242–262.

Tindale, N. B.
1974　*Aboriginal Tribes of Australia: Their Terrain, Environmental Controls, Distribution, Limits, and Proper Names.* Berkeley: University of California Press.